

わたしも 筆

自然と直接触れ合い自然
の神秘を学習してほしい



▷五月末に鶴小の三、四年生が、丹頂鶴自然公園内の小川にホタルの幼虫を放流しました。

ホタルはとても魅力的で不思議な昆虫ですが、自然環境のシンボルとも言われ、暗い闇や良好な自然環境があつてこそ飛び交います。

はるか昔、田を作り、稲作を始めたころにもホタルは光っていました。それを見たわたしたちの祖先も、その美しい光景に魅了され、多くの書物の中にホタルについての記述があることから想像できます。

平安時代、清少納言の「枕草子」の中に、次のような記述があります。

「夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢のおほく飛び違いたる。また、ただ一つ一つなど、ほのかにうち光っていくもおかし。」



尾崎美津郎
(鶴田小学校校長)

と、日本の四季が織りなす風情あるものとして、夏はホタルを取り上げ、松尾芭蕉や小林一茶も俳句に詠んでいます。

また、このようなホタルは全国各地に生息し、ホタル(螢)の名がつく地名が各地に見られます。県内でも青森市の浅虫、駒込、浪岡、中泊町の中里などに蛍沢、蛍谷などがあり、ここには多くのホタルが飛び交っていたことがうかがわれます。

このように、ホタルは有史以来、わたしたちの身近な生き物として、親しまれ愛されてきましたが、このごろめつきり数が減りました。原因は、農業、養豚場などからの汚水、生活排水、砕石・土木工事による土砂流入、川砂利採取、河川・用水路の改修など、生息環

尾崎校長がホタルの保護にかかわるようになったのは、中里小学校勤務の四年前から。全校朝会で子どもたちに「ホタルを見たことがありますか？」と質問したところ、大半の子どもたちが見たことがないことを知り、実際にホタルが飛んでいるところを見せたいと思ったのがきっかけだそうです。

境の破壊・汚染により、ホタルがすみにくくなっているからです。

そこで、鶴田町では数年前からホタルを呼び戻す会(池田勇作会長)が、ホタルの保護活動に取り組んでいます。五月三十一日、本校の三、四年生も総合的学習の一環として、ホタルの幼虫と餌になるカワニナを廻壇の丹頂鶴自然公園に放流しました。

以前と違い今の子どもたちは、自然からかけ離れた生活をしている場合が多いので、この活動を通して、自然と直接触れ合い、その中で自然の神秘、不思議、仕組みを体験的に学習してほしいと思っています。また、ホタルの生態の観察を通して、生き物をかわいがり、優しい心、人に優しい愛を育て、命を大切に育つ心が育つてくれればと思います。

ばと思っています。日本には四十六種類のホタルがありますが、そのうち青森県でよく見られるのはゲンジとハイケボタルで、梵珠山にはヒメボタルやクワダボタルも見られます。

また、通常「光」は熱を伴うことが多いのですが、ホタルの光は決して熱くありません。それは「冷光」と呼ばれ、光ることによって仲間同士がコミュニケーションをしているのです。

成虫は十日くらいの命です。その間何も食べないで、卵を産んで死んでしまいます。ホタルがよく飛び交うのは、日没後の午後八時から九時ごろです。この夏には、丹頂鶴自然公園に家族そろってホタルを見に行つてはどうでしょうか。